

ダリン・テネフ「あなたは私の死だった」への応答

南谷奉良

昨年に引き続き、ダリン・テネフ先生原稿の翻訳を担当させていただきました南谷と申します。「文学と死」をめぐる主題を広く切り開くと同時に、底深くまで掘りさげた論稿を前に多くの感想とコメントを思いつきますが、今回は特に、このセミナーに参加されている学部生の理解の一助となれればと思い、次の箇所にある「注釈」を施せればと思います。ディラン・トマスの詩を響かせながら、特にブランショの議論を下敷きとしている一節です。

文学は死が住まう領域でもある。文学のなかで生き残り、文学として生き残るものは、決してそのものそれ自体ではなく、肉体をもった人物ではなく、生きた実物そのものではない。文学の言語は指示対象が不在になる可能性を前提としているがゆえに、死の可能性があらかじめ文学の言語自体のなかに刻印されているのである。

「文学は死が住まう領域でもある」とは、どういうことなのか。そして「文学の言語自体のなかに、すでに死の可能性がすでに刻印されている」とは何を言っているのか。これらは文学のなかの「死」を理解するための重要な前提事項となっており、この部分が理解できないことには、その他の部分の把握も難しくなります。私自身、具象的な理解を欲するので、ここでは私が体験した具体的な死から注釈としてのコメントをさせてもらえればと思います。はじめは何の話をしているのかと訝しまれると思いますが、最後には上記の引用に戻りますので、少し辛抱して聞いていただければと思います。

*

はじめに私が体験した猪の巻狩の話をしたと思います。機会があって、一ヶ月ほど前にある県の地元猟友会が行っている巻狩に参加してきました。この「巻狩」を簡単に説明しますと、まず早朝から複数人で、巻狩を行なう山の周辺を車で周り、「見切り」という実地検分を行います。山の斜面に残された動物の足跡の形や向き、濃さなどから、どこに獲物がいるか、どこから獲物を追うかを検討する作業です。付けられたばかりの足跡だと「なま」や「なまあし」と言い、獲物が時をおかずその場所を通った濃厚な印になります。この見切りが済むと、各自連絡をとりあい、車である集合場所に移動します。そして誰をどこに配置するか、どのように囲むかという簡単な会議を行ってから、再び車に乗って各自の持ち場に向かいます。勢子が^{せこ}猟犬を山に入れると、犬たちは獣の臭いをたどって獲物を見つけ、絶えず吠えることで、山に散らばる射手におおよその獲物の位置を知らせてくれます(ちなみにあとで犬たちを回収するために、彼らの首にはGPS機能のついた端末が付けられています)。猪は犬に追われると、いわゆる獣道を通ります。狩猟用語では「筋」といいますが、射手の方たちは無線機で連絡をとりながら、この筋に獲物が来るのをひたすら待つのです。私は狩猟免許も猟銃も持っていませんので、単に近くに猪が来たら、山の上に行かないように脅かして進路を調整する役だったのですが、普段は気にも留めない動物の痕跡を見つけ出すことや、山の急斜面を滑り落ちそうになりながら歩き、樹々のあいだでじっと動物を待つという体験はかけがえのないものでした。

結局、今回の巻狩で猪を取ることはできなかったのですが、代わりに毘鹿で一頭の鹿が捕れました。巻狩を終えて犬や狩猟道具が置かれている基地のような場所に向かうと、大きな水槽のなかに、すでにお腹の臓物がとりだされた鹿が沈んでいました。はじめての参加でしたが、私は許可をもらってこの鹿一頭を解体させてもらうことになりました。今回は「二番さん」という、親方に次ぐ二番目に偉い人に鹿の解体方法を教えてもらいました(私が参加したところでは、人を固有名で呼ばずに、番号で呼びます)。解体をする前には印象的な作業があり、捕獲者(このときは二番さん)が、その固有名や捕獲場所、捕獲方法を記した書類を手に持ち、捕獲動物の前で写真を取ります。捕獲の結果を写真とともに書面で役所に提出するためです。それから解体準備です。二人がかりで鹿の脚をもって水槽から体を引きずり出し、首に縄をかけて滑車に吊るします。滑車を回し、鹿の体を空中にあげてい

き、二番さんと私が鹿を挟む形で解体作業をすることになります（解体作業は一人では何時間もかかるため、通常複数人で行います）。

いちばん上まで鹿をあげたとき、その首が縄できつく締めあげられているものですから、口と鼻から血や体液が垂れていました。とろりとした、ぬるぬるした、光沢のある血です。それが死体の顔から垂れ、二番さんが着ているオレンジ色のジャケットのポケットのなかに入っていました。二番さんは気づいていないのか、もはや気にしていないのかはわかりませんでした。鹿の顔がすぐ近くにあり、そこから垂れる血がポケットのなかにどんどんたまっていくさまを私は見ていました。恋人同士が顔を近づけるときの近い距離があるとおもいますが、それと同じ近さです。鹿の顔がすぐ目の前にあります。鹿も他の動物と同じように目を開いて死ぬので、解体作業をしているときは、その目が私の顔のすぐ前であってこちらを見ています。もちろん見ているわけではないですが、この鹿の目に見られながら解体をすることになります。

実際の解体に掛かります。この類の話が苦手な人には申し訳ないのですが、これからの議論で重要になるので話させてください。まず鹿の脚をもって、蹄の少し上のあたりにナイフで円状に切り込みを入れ、脚の付け根に向かって皮を縦に裂いていきます。そして、その裂いた皮を左手で力強く下にぐいとひっぱりながら、右手で皮と筋肉のあいだにある白い膜をナイフの先端でちょんちょんと切っていきます。一般的に想像されるように強引に肉を切り分けるのではなく、あくまで筋状の膜を先端で切る作業です。何度か二番さんに、ナイフの刃で肉を切ろうとするなど怒られましたが、左手は力を入れ、右手は力を抜くという力の配分が難しく、また脂がつくので滑ってひっぱりにくいのですが、次第にコツをつかんでうまく剥ぐことができるようになりました。

かつて森のなかを走り回っていた筋肉を切り分けているのは不思議な気分でしたが、この皮膚を剥いでいく作業のなかで、その筋肉にはいつのまにか、ある変化が訪れていました。ふと「食肉」になっているのです。日常生活で何度も見たことのある、既視感のある美味しそうな肉です。実に猟師の方々は口を揃えて「解体をしているときによだれが出る」と言うのですが、実際そうなのです。美味しそうな肉を前に、口のなかによだれが湧いてくるのです。あとは枝肉を部位ごとにきれいに切り分け、骨からはずして、卓球台の上に切り取った肉を部位ごとに置いていき、

今度はそれを複数人で細かく切り分けていきます。解体作業をしている場所の近くには、五十センチほどの寸胴鍋二つが火にくべられ、一つの鍋では、湯気を立てて大根がぐつぐつと煮えていました。私は解体と肉の切り分けの作業後には特にできることもなかったので、他の猟師の方たちの作業をばおっと見ていました。そのときに一つ気がつきました。いつのまにかあの一頭の鹿がなくなったということに気づいたのです。もちろん解体したのだからそんなことは当たり前なのですが、さきほどまで私に強いリアリティを与えていたあの鹿の死体がなくなったことに奇妙な驚きを覚えました。最初に獲物の写真を撮った理由がいまはよくわかります。死体がなくなってしまうからです。肉だけではなく、剥いだ毛皮は燃やし、蹄もアクセサリー用に切り取られます。さきほどまで鹿を吊るしていた滑車のところを見ると、首から下が骨になった鹿の顔がぶらさがっていました。まだ食べてもいないのに、肉はすべて卓球台の上にあるのに、鹿を解体したら鹿の死体がなくなってしまったのです。

*

「あなたは私の死だった」という論稿を前に、なぜこの鹿の卷狩の話をして、何を言おうとしたのかを説明します。一つには、目を開いたまま死んだ鹿の死は、血や体液を口や鼻から流していた鹿の死は、生きている死であり、死について語るために、この「生きている死」というものを導入しようとかんがえたためです。付けられたばかりのなまあしの痕跡からは森のなかでうごめく生がたちのぼってきますが、同じように鹿の死体に生があるわけです。しかしそれはどこかの瞬間でなくなってしまうました。つまり生きている死が死ぬという意味で、死にも死ぬ可能性が、死の死の可能性はあるはずで、生きている死が死んだのは、おそらく私の前の筋肉が食肉となり、美味しそうな意味になったときです。ある生きている死が死んだ瞬間に、あるいは生きている死が死ぬあいだに、死んだ鹿の生の意味が湧きでたこととなります。おそらく鹿の死体が血や体液を流し、私の口の中によだれが湧いたときが、つまりぬるぬるしたものが生じたときが、ある変化を告げる死のモーメントだったのだと思います。鹿の死体がなくなってしまったことは、この生きている死の死と関わっており、生きている死があるうちは鹿の死体があり、生きている死が死んだときに鹿の死体はなくなってしまったのだと思います。

しかし何より大事なものは、私の経験したあの出来事は、いまここで「卷狩の話」

として話したことで、鹿の死体から「肉」という「意味のある死」をとりだし、この応答のためにあの鹿の死を利用して語ったことで、私はそれを機能化された死にしてしまったのではないかということです。いまこうして話しながら思います。私が話しているこの話のなかで、私が単独的に体験したものから、何かが削ぎ落とされていく感覚を、「あなたは私の死だった」に向けた応答するなかで、決定的に何かが違ってしまっていることを感じています。例えば私はいまの巻狩の話のなかで、血や体液、よだれといった「ぬるぬるしたもの」——それは「老水夫の歌」の一節の語彙に近づけたものですが——を、まるで隣接した概念のように対置していました。もちろん実際にそのとおりのことが起こったので、そのように話したのですが、そう話したこと自体にいま強い不快感を覚えています。また最後には「生きている死」や「美味しそうな意味」などと、体験した事柄に名を与え、概念にしました。それを聞いたときには、いかにもできすぎの話に聞こえたかもしれません。その疑いを突き詰めていくと、これまで話した巻狩の話は創作の可能性が、まったくの嘘という可能性すらでてきます。もしかすると、私はどこかから聞いた話、読んだ逸話をさも自分の体験のように話したのかもしれない。

もちろん嘘ではありません。どの出来事もほんとうで、嘘も誇張もなく話しました。おそらく皆さんもその話を信じてくれたと思います。さきほど話したことの克明さが証言してくれると思いますが、すべてほんとうのことです……といても、もう手遅れです。いまや私の体験の真実性や再現の正確性を裏付けることはできません。ことばを尽くしてそれを名指そうとしても、残るのは何かの抜け殻です……と、こんなふうに一応言いますが、このレトリックとは別に、起こったこと自体は信じてください。写真もありますし、もっと細かい話をしてもいいです。嘘や誇張はゼロです……だめです。こうやってどれだけ「ほんとうに起こったことなんだ」と説明しても、いくら真実性を哀願しても、どれだけ克明に、リアルに対象を名指そうとしても、うまくいきません。それはいま話している私のこのことばが文学の言語に近づきつつあるからです。

いまは口頭で話していますが、おそらく私はこの話を『人文学報』という紀要に書くこととなります。しかしいま話している話が、このまま、このとおりの文言で紀要に掲載されるわけではありません。そのときにはこんな訥々とした話し方ではなく、もっと整流された口ぶり、より明確な論旨をもった、より上等な語彙を交

えた応答を書くでしょう。そうすると、みなさんがいま聴いているこの話とはもっと違ってしまい、そこで〈私〉はもっと殺されていると思います。言明としていえば、いま〈私〉の単独的な経験を殺しつつある、みなさんが聴いているこの話は、いま読まれているこの話とも重なりあわなくなっており、ここには二つの殺害現場があります。巻狩への参加と鹿の解体は私にとって重要な経験だったのですが、このように話したことで、それをいかにも人文系の知の領域に収まるようなエピソードにってしまったと思います。私が経験した死はもはやばらばらに解体されて、いまや肉をもった文字になっています。それはやはり悲しいわけですが、しかしそれが文学なのだと思います。

最初の引用部に戻れば、「文学とは死が住まう領域でもある」とは、このことです。「文学の言語は指示対象が不在になる可能性を前提としているがゆえに、死の可能性があらかじめ文学の言語自体のなかに刻印されて」おり、それが第二節の後半にある二つの相矛盾する言明の一つ「文学空間に入ることは、自分自身の不在という、常に、すでに存在している可能性を引き受けることである」につながっていきます。このことを私は自分の単独性が殺される話によって説明しようとしたわけですが、これによって論稿の前提事項を理解する一助になればと思います。実際、ここまで話してきたことは、巻狩の体験のあとにテネフ先生の寓意的読解を知ったことで可能になった話です。ですからいま私は「巻狩の話」ではなく、この「鹿の死の寓話」をテネフ先生の寓意的読解に与え返します。ぜひ紀要に掲載される「あなたは私の死だった」の翻訳とこの話をもう一度読んでみてください。そこで私のあの単独的な経験、いまのこの時間にいる〈私〉はもっと殺されているはずです。しかし最も重要なことは、そこで〈私〉の殺害の代わりに開かれるものです。テネフ先生が論稿のなかで引用していることばを使わせてもらえば、「私たちが死なないように私たちを殺すのが文学」です。ただ同時に、あなたたち、あなたたち読者が殺されないように、あなたたちを生きさせるのが文学でもあり、それこそが「あなたは私の死だった」が最後にたどりついた、複数の解釈の可能性を言祝ぐ文学の読者論なのだと思います。

(南谷奉良＝一橋大学・博士課程)

山本 潤

今回のテネフ先生の講演では、文芸作品における二つの「死」の様態が主題になっていました。すなわち、語りの対象としての「死」と、それ自身が作品中で名指しされるのではない、文学を文学たらしめる「死」です。私のコメントでは前者、すなわち文学が直接語る、「名指される死」に触れたいと思います。

この論考では、直接的に文学の語りの対象となる「死」は、大きく二つに分類されています。まず一つ目が、それ自体およびそれを物語ることが主題ではない、他の物語の要素を引き立たせるために使われる、物語の内的副次的構成要素としての「死」です。それは語りの対象となるものの、あくまでも物語の主題や展開に寄与するために配されるという性質のものであり、その「死」は「機能的死」とされます。それに対し二つ目の「死」とは、単なる機能的役割のみにとどまらず文学上の主題ともなるもので、そうした「主題化された死」の場合には、「死」に意味が与えられます。これはその「死」に至るまでの「生」に意味が与えられる、ないしは意味がないことが与えられることを意味しますが、その代表例として挙げられていたのが、ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』でのジークフリートの死でした。以下にこの英雄の「死」に関連した考察を述べたいと思います。

文芸における「死」としてジークフリートのそれを考えるに際し、念頭に置いておくべきなのが、『ニーベルンゲンの歌』の成立背景と、そこに「語られる」ことへの作品成立当時の認識です。ベンヤミンも『物語作者』の中でその多義性を駆使しているように、「物語Geschichte」という語はもともと「出来事」を表す語であり、同時に「歴史」も意味します。そして、ゲルマン民族にとっての「英雄時代」の史実から生まれ、俗語により筆記されることのないまま中世まで口伝されてきたジークフリートのものをはじめとする様々な英雄譚は、自分たちの過去につながる偉大な王や戦士たちについての記憶を伝える、世俗の貴族階級にとっての歴史伝承メディアでした。そこで語られるのは、複数の歴史的事象が伝統的な物語の構図やモチーフを通し、英雄一代の物語へと凝縮されたものです。内容的には史実から逸脱しているものの虚構とはみなされず、それはまさに「出来事」をつたえる「物語」であり、すなわち「歴史」であったのです。そして英雄たちはその「死」の後に初

めてそうした「語り」の対象となりました。「英雄の死は最後の刻になって、最後の瞬間に、その英雄を英雄として認定」し、彼らの「生」はその認定を経て初めて「物語」、そして「歴史」として人々が語り継ぎ記憶する対象となったのです——英雄の「死」を語る物語には、彼らの「生」に意味を与えるのみならず、その「生」を記憶し伝承することにより、己の属する共同体の過去を知り、自身のアイデンティティを確認するという役割が期待されていました。

しかし、そうした歴史伝承メディアとして機能していた口伝の英雄譚は、文字の文化との邂逅を経て変質し、12世紀後半に花開いた世俗の宮廷文化を背景とした俗語による書記文芸の隆盛のうちに、ジークフリートにまつわる英雄譚は、『ニーベルンゲンの歌』において作品素材として利用され、「聞いたままに語り継ぐ」という口承文芸の流儀からはずれてゆくこととなります。その際に、ジークフリートの「死」は、口伝の英雄譚が語り、またジークフリートを語る対象に値する英雄たらしめた「死」とは異なるものへと変容してしまいます。すなわち、英雄としての「生」と「死」により文学の「語り」の対象となったジークフリートは、『ニーベルンゲンの歌』という文学作品で与えられた「死」によって、古来の英雄としての姿を失うこととなったのです。

確かに、ジークフリートの死は『ニーベルンゲンの歌』の中での主要エピソードの一つであり、それは物語後編の大枠をなすクリームヒルトの復讐の動機となるのと同時に、それ自体が超人的特性を具えた英雄の死という、一つの文学上の大きな主題の伝統に連なるものです。しかし、一般的な英雄の死——死の運命に敢然と立ち向かいつつ、その運命をまた従容として受け入れるという悲劇性を帯び、ゆえに記憶に値するものとなる——とは正反対の「死」が、『ニーベルンゲンの歌』のジークフリートには与えられています。彼は当初、中世に至るまで歌い継がれた英雄譚の主人公に相応しく、また口伝ではおそらくそのような存在として語られていたと思われるように、古代ゲルマン的な倫理規範を持つ、超人的な膂力を具えた英雄として登場しますが、徐々に宮廷に取り込まれ、中世宮廷騎士としての性格を強めてゆきます。そして騎士としての礼儀作法を重んじた行為を取ったばかりに、彼の命を狙う仇敵ハーゲンに隙を見せることとなり、最後はその死を拒み、呪詛を吐きつつ命を落とします。『ニーベルンゲンの歌』でのジークフリートの「死」は、万人に記憶される「物語／歴史」の主題としての「死」ではなく、せいぜい妻クリーム

ヒルトにのみ記憶され、その復讐を導く動機としての役割を与えられた、まさしく「機能化」されたものとなっているのです。この中世宮廷騎士としての「死」を死ぬ古の英雄ジークフリートというアンビバレントな「死」には、まさに「歴史」と「物語」が分化してゆく過程が表出しているのではないのでしょうか。

(山本潤 = 首都大学東京・准教授)